

平成 30 年 5 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370075

研究課題名(和文)「不幸な死者」の観念の比較文化論的研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of Unhappy Ghost Stories

研究代表者

佐藤 弘夫 (SATO, Hiroo)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：30125570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：死後に行くべき理想世界(浄土)の観念が共有されていた中世に対し、そのリアリティが失われた近世では、死者はいつまでもこの世に留まるようになった。そのため近世では、死者と生者の個別の契約にもとづき、供養の継続を条件にこの世の内で両者の世界の厳密な分節化が成し遂げられた。しかし、死体遺棄・供養の放棄など、生者側の一方的な契約不履行は跡を絶たなかった。そのため、恨みを含んで無秩序に現世に越境する死者も膨大な数に上った。個々の死者が明確な復讐の対象をもっていた点において、また解決に超越的存在(仏)を介在させない点において、近世の幽霊は救いから疎外されて苦しむ中世の死霊とは異質だった。

研究成果の概要(英文)：The ghosts of the medieval period were for the most part those of people of power and prosperity, the extremely exceptional. These hauntings ended not with a vendetta being brought to a bloody conclusion, but with the ghost finding salvation in the Buddha. In the early modern period, quite to the contrary, it was possible for anyone at all, no matter how ordinary, to become a ghost. There is also a key difference in quality between the grudge held by the early modern ghost-the satisfaction or removal of which was unmediated by any transcendent savior-and the medieval ghosts, suffering and shut off from the salvation which would end that suffering.

By the early modern period, ghosts would no longer seek salvation of the religious kind. They had but a single goal-the ruthless pursuit of revenge on those that killed them and abandoned their bodies. This is the reason, then, for the mass emergence in the early modern period of vengeful ghosts pursuing vendettas.

研究分野：日本思想史

キーワード：幽霊 死者 近世 コスモロジー

## 1. 研究開始当初の背景

私は今世紀に入ったころから、海外の学会・シンポジウムなどにおいて、日本学を研究する学生や若手研究者の前で講演する機会を多く持った。その地域は中国・韓国・台湾などの東アジア、イタリア・イギリス・ドイツなどのヨーロッパ諸国、アメリカに及んだが、どの場所でも海外の若い人びとが抱く日本の現代文化、とりわけサブカルチャーに対する強い関心が印象に残った。

そうした関心に応えるべく、申請者は日本のサブカルを代表するホラー文学・映画、ゆるキャラ、アニメなどについて情報を収集し、講演の内容に盛り込むことを目指したが、そこで痛感したことは、日本のアカデミズムが、サブカルを広いコンテクストに位置づけて学問的レベルで語ることのできる言説を、いまだにもっていないという事実である。

本研究のテーマである江戸の幽霊に関していえば、その研究の大半は文学・美術史といった分野の区分を前提にした、幽霊を素材とする文芸作品・歌舞伎・浮世絵等についての個別研究であり、それが日本列島における「不幸な死者」の系譜においてどのような位置を占めるのか、それがいかなる形で近代に継承されていくのか、現代のホラー文化とどのような関係にあるのか、といった問題意識はほとんど見出すことができない点に大きな疑問を感じた。

## 2. 研究の目的

太古の昔から、人は身近な死者が末期の苦しみから解放されることを願いつづけてきた。にもかかわらず、苦悩を背負った「不幸な死者」は古今東西を問わず常に存在した。日本列島でも、古来多くの異形の死者の姿がみられた。

本研究で対象とするのは、江戸時代における「不幸な死者」の観念である。江戸時代は現代まで引き継がれるさまざまな死者供養が庶民の世界に定着するとともに、不幸な死

者の代表格である「幽霊」が大挙して登場する時代だった。大量の幽霊譚や幽霊の画像が生み出され、怪談は江戸後期の大量文化の中心テーマとなった。しかし、その一方で、江戸期の幽霊については文学や美術史などの個別分野で活発な研究が進められているものの、古代から近代に至る広いコンテクストのなかでその特質を解明し、歴史上に位置づけようとした研究は皆無である。

本研究はそうした現状を鑑み、(1)江戸期の幽霊について、死者供養や墓地の変遷を切り口としたコスモロジーの変容という視点から、中世以前の怨霊・御霊などと対比しつつその特質を明らかにすること、(2)それを学問の方法として錬磨することによって、「不幸な死者」をめぐる海外諸地域との比較文化論的研究の可能性を追求すること、(3)日本列島における「不幸な死者」「幸福な死者」の観念の伝統を踏まえて、現代社会が直面しているターミナルケアや看取りに関わるさまざまな課題に対して具体的な提言を行うこと、の3点を基本目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、江戸期の幽霊の特質を、列島の「不幸な死者」の系譜というコンテクストで読み解こうとするまったく新たな思想史研究の試みである。またその成果を方法論一般の問題として深化し、海外諸地域との比較文化論的研究の道を探ることを目的とするものである。したがって、(1)本研究の目的に添った形での「不幸な死者」にまつわる基礎データの収集・整理とその分析、(2)その成果を踏まえた国内外の研究者との研究打ち合わせと討論、(3)研究成果の国際学会での発表、を研究計画の骨子とした。

加えて、本研究では幽霊だけを取り上げるのではなく、「不幸な死者」を取り巻く思想空間全体と歴史的コンテクストのなかで幽霊の意味を探るという方法を追求した。さらに、その空間の聖性の変質の問題にも着目す

るため、いくつかの具体的なフィールドを設定し、実地調査と理論研究を並行して推進した。

#### 4. 研究成果

(1)この世を遠い浄土に到達するまでの仮の宿りとみる中世の世界観は、14世紀からしだいに変容をみせる。彼岸世界のリアリティがこのころから急速に失われ、人々の主要な関心があの世からこの世のことに移行していく。

これは彼岸世界が衰退・縮小し、現世の重みがそれに比例して拡大していく現象として捉えることができる。近世を経て近代まで継続する社会の世俗化が始まるのである。人々は来世での救済よりも、この世での幸福の実感と生活の充実を重んじる道を選択するようになった。

このような世界観の変容は、当然のことながら当時の人々の死や救済の観念にも決定的な影響を及ぼした。他界の観念が薄らいだいま、死者の行くべき地はもはやこの世と隔絶した遠い浄土ではなかった。人は死して後もなお、この世に留まり続けるのである。成仏はもはや遠い他界への旅立ちではなく、この世での安らかな眠りにほかならなかった。この世に留まる靈魂の依り代(よりしろ)となったのが、遺骨と墓標だった。あらゆる死者の靈魂は遺骨の眠る墓を離れることなく、ほとんど永久的にそこに棲み続けるのである。「草葉の陰で眠る」という近現代人が共有する感覚は、こうした転換を経て江戸時代(17世紀)以降に形成されたものだった。

おりしも17世紀は、世代を超えて継続する「家」(イエ)の観念が庶民層にまで広がっていく時代だった。自分たちがいまいるのは先祖のおかげであり、代々の先祖をきちんと供養しなければならないという認識が人々の間で共有されるようになった。家ごとの墓地が定着し始めるのもこの時代だった。

(2)こうして江戸時代の初めから、墓地に住んで子孫の訪れを待っていると考えられた死者の数は急速に増加していく。それは生者の世界に、死者が無秩序に越境する可能性を著しく高めることになった。

そこで近世の人々は死者の越境を防止すべく、死者とある契約を取り交わすことにした。一つは墓地を、常にありがたい読経の声が聞こえるようなお寺の境内に作ることである。この約束を果たすために、17世紀の日本では都市の内部に新たに大量の寺院が建立された。寺の境内に墓地をもたなかった中世以前の寺院に対して、これらの近世寺院は本堂と墓地がワンセットで造られているところにその特色があった。日本でのお寺と墓地との深い結びつきは、このときからはじまるのである。

もう一つは、近親者が定期的に墓地を訪れ、死者が寂しい思いをしないで済むように心掛けることである。また一年に一度、お盆といわれる時期には死者を自宅によんで、手厚くもてなすことである。お盆には先祖の霊を迎えるためのたき火が焚かれ、霊が滞在するための仏壇が設けられた。死者と生者との定期的な交流が、国民的な儀礼として定着していくのである。

こうした条件の代償として、死者は自分の墓地におとなしく留まることを約束させられた。生者の領域と死者の領域が厳密に区別され、普段は相互に相手の領域を侵犯しないことが定められたのである。

(3)しかし、そうした契約にもかかわらず、近世では冷酷な殺人と死体遺棄、供養の放棄など、生者側の一方的な契約不履行は跡を絶たなかった。そのため、恨みを含んで無秩序に現世に越境する死者も膨大な数に上った。これが江戸時代の幽霊の実態だったのである。

近世の幽霊は、もとはごく普通の庶民だっ

た。生者が約束を守って供養を継続すれば、死者はおとなしく墓にとどまるものと考えられていた。しかし、生者が契約を破棄して無残な仕打ちを加えたとき、死者はたちまち恐ろしい幽霊となって、生者の世界に越境してくるのである。それぞれの幽霊は明確な復讐の対象をもっていた。その復讐が遂げられないうちは、どのような対応をとっても幽霊は決して満足することがなかった。仏の力をもってしても、その怨念を防ぎ留めることはできなかったのである。

中世にも未練を残してこの世をさまよう死霊はいた。平安時代の上流貴族の源融（みなもとのとおる）は、みずからが精魂込めて作り上げた邸宅に執着して、死後もそこに住み続けたという（『今昔物語集』）。中世初期に編纂された『法華験記』（ほっけげんき）と『今昔物語集』には、立山の山中にある地獄で苦しむ女性が霊となって出現し、救いを求める話が収められている。彼女らが願うのはだれかに対する復讐ではなく、仏の力による地獄からの脱出だった。

中世の死霊のほとんどは、生前に権力をもち栄華を極めた特別な人物だった。その結末も個人的な復讐の完結ではなく、仏による救済であった。他方、近世の場合、ごく普通の庶民だれもが幽霊になる可能性があった。また、その遺恨の解消に超越的な救済者を介しない点において、救いから疎外されて苦しむ中世の死霊とは異質だった。

近世の幽霊はもはやだれも宗教的な救済などは求めなかった。その目的はただ一つ、自分を無残に殺害して放置した相手に対する仮借ない復讐だった。かくして近世においては、世俗社会の人間関係をそのまま反映する怨念に満ちた大量の幽霊が誕生することになったのである。

(4) 日本文化に関する概説書を読むと、しばしば日本人の死生観の特色について記述し

てある。ほとんどの本で、死者は遠くに去ることなく、いつまでも身近な場所に留まるといのが日本人の伝統的な信念だ、という説明がなされている。

この通説の源流は、民俗学の祖とされる柳田国男（やなぎたくにお）の説にあった。日本人の死生観・靈魂観を論じた柳田の代表的著作である『先祖の話』（1910）のなかで、柳田は亡くなった先祖を身近な存在と捉え、それとの日常的な交流のなかで日々の生活を営む日本人の姿を描き出した。柳田によれば、霊が留まると信じられていた場所は山だった。死を迎えた人の魂は、生前の暮らしを営んだ故郷や子孫の生活を見守ることのできる山の頂に留まり、祭りのたびごとに家に迎えられた。

この柳田の説がもつ強い説得力の背景には、死者がいつまでも身近に留まるという観念が、今日においてもなお、多くの日本人にとってリアルに認識できる状況が存在するように思われる。墓参に訪れたとき、私たちはそこに死者の存在とその視線を感じとることができる。けれどもそれが、この列島上で時代をこえて受け継がれた「日本的」な感性ではなかったことはすでにみてきた通りである。

柳田が見取り図を作り、多数の民俗学者や宗教学者がトレースした「身近な先祖」は、この列島の長い歴史のなかで、三〇〇年ほどの歴史をもつ新しい伝統にすぎなかった。それ以前には逆に、この世に留まる死者は不幸な存在であるという観念が主流をなしていた。そうした世界観の断絶が、中世と近世における幽霊のイメージの相違となって現れることになったのである。

5. 主な発表論文等  
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）  
佐藤弘夫、歓談する死者たち-変容する死

後世界のイメージ、死生学研究、査読無、  
2017 年号、2017、65-82  
Sato Hiroo、Vengeful Spirits, Divine  
Punishment, and Natural Disasters、  
*Religious Studies in Japan*、査読有、  
Vol. 3, 2016、pp.3-20  
佐藤弘夫、彼岸から届く声-中世の危機意  
識と文学、日本文学、査読有、63 巻 7 号、  
2016、43-53  
佐藤弘夫、ヤスクニの思想と記憶される  
死者の系譜、岩波思想、査読無、2015 年  
7 月号、2015、89-104  
佐藤弘夫、目に見えぬものたちと生きる、  
哲学、査読有、66 号、2015、9-24

〔学会発表〕(計 3 件)

佐藤弘夫、国民国家の形成と死者の記憶、  
韓国日本近代学会、慶北大学、2016、基  
調講演  
佐藤弘夫、幽霊の発生、国際シンポジウ  
ム・対話の日本研究、台湾大学、2016、  
招待講演  
Sato Hiroo、The Birth of Ghosts、  
Firenze symposium、フィレンツェ大学、  
2015、基調講演

〔図書〕(計 2 件)

Sato Hiroo、International House of  
Japan、*How Like a Dod-Deification in  
Japanese Religion*、2016、262  
佐藤弘夫、幻戯書房、死者の花嫁、2015、  
205

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
<http://db.tohoku.ac.jp/whois/detail/2985fe037c84fef8ff68739828f803cd.html>

(1) 研究代表者

佐藤 弘夫 (SATO, Hiroo)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：30125570

(2) 研究分担者

( )  
研究者番号：

(3) 連携研究者

( )  
研究者番号：

(4) 研究協力者

( )